

基盤研究(A)「身心変容技法と霊的暴力～宗教経験における負の感情の浄化のワザに関する総合的研究」

(研究代表者：鎌田東二)

研究分担者：鶴岡賀雄（東京大学教授）・島菌進（上智大学グリーンケア研究所所長）・津城寛文（筑波大学教授）・井上ウイマラ（高野山大学教授）・河合俊雄（京都大学こころの未来研究センター教授）・棚次正和（京都府立医科大学名誉教授）・町田宗鳳（広島大学教授）・齋木潤（京都大学教授）・篠原資明（京都大学教授）・倉島哲（関西学院大学教授）・金香淑（目白大学前准教授）・永澤哲（京都文教大学准教授）・稲葉俊郎（東京大学助教・医師・循環器内科）・野村理朗（京都大学准教授）・林紀行（大阪大学助教・医師・統合医療）

研究目的：「身心変容技法の比較宗教学一心と体とモノをつなぐワザの総合的研究」（基盤A：2011年～2015年）の成果をさらに発展深化させ、「身心変容技法」が引き起こし得る負の局面を含め総合的に研究する。「身心変容技法」とは、「身体と心の状態を当事者にとってよりよいと考えられる理想的な状態に切り替え変容・転換させる諸技法」を指すが、その理想や理念とは裏腹に、それが「霊的暴力」（超越的な世界観に裏付けられた破壊性）を引き起こすことがままある。「身心の荒廃」が様々な局面で社会問題となっている時代状況下、その負の連鎖から抜け出していくための宗教的リソースやワザ（技術と知恵）として「身心変容技法」を正當に位置づけるためにも、その負の局面の危険性や問題性を明らかにしつつその応用可能性の道を探ることは喫緊の課題であり宗教研究の責務である。

概要：身心変容（transformation of body & mind）および「霊的暴力（spiritual violence）」「霊的虐待（spiritual abuse）」の概念を明確にし、その個別事例を比較検討しながら、そこに共通する構造や文法を取り出し、そのヴァリエーションを明らかにする。特にそれが「負の顕われ」として問題となった局面を解明する。禅修行における「魔境」の問題、大本教事件における「鎮魂帰神法」の問題点、オウム真理教の「水中クンバカ」や「土中サマディ」や「血のイニシエーション」などがもたらす「霊的虐待」と坂本弁護士殺害事件や地下鉄サリン事件との関係、瞑想によって引き起こされることのある「クンダリニー症候群（Kundalini syndrome）」、いわゆる「カルト教団」とされてきた人民寺院や太陽寺院やヘヴンズ・ゲートなどの「集団自殺」、チャールズ・マンソンによる殺人事件など、修行や薬物使用などによる「身心変容」とともに顕在化した諸種の「霊的暴力」の事例を比較研究し、その特徴と問題点を明らかにする。「身心変容」の「負の側面」に焦点を当てつつ、聖と正の側面もより立体的に浮き彫りにする。

研究計画書

2015年5月12日 鎌田東二

- 1、大本における「鎮魂帰神法」の問題～日本型シャーマニズムにおける神懸りと審神者
- 2、巫病と禅病～カミダリーと白隠の内観法と軟酥の法
- 3、禅における「魔境」の問題～『摩訶止観』の「魔」論の考察
- 4、峨眉丹道気功における「走火入魔」観と「偏差治療」法の研究
- 5、「魔」とは何か？
- 6、脱「魔」の技法
- 7、「『神』を『語る～騙る』者の位相」～宗教的言説の幻想と霊的暴力
- 8、宗教と芸術が持つ超越の技法における「霊的暴力」の浄化のワザ～祈りと歌と踊り
- 9、「霊的暴力」ないし「霊的虐待」の諸相・諸形態についての事例研究
- 10、麻原彰晃が持った「魔境」認識と「最終解脱」の間～オウム真理教事件の根幹にある問題
- 11、研究統括

「身心変容技法と霊的暴力」研究計画書
東京大学医学部付属病院 循環器内科

稲葉俊郎（東京大学）

1 全体計画（2015～2019）

現代医療を見渡すと、現在主流である自然科学をベースとした西洋医学だけでは不十分であることは認識されている。ただ、医療現場において様々な伝統医療や補完代替医療（Complementary and Alternative Medicine：CAM）、統合医療は実践されていないのが現状である。その理由は様々挙げられるが、伝統医療や補完代替医療の正の側面

も負の側面も正しく認識されていないことが原因の一つと考えられる。心身変容の技術は正しい方向に使用すれば未来の医療における可能性を持つが、誤った方向に使用すると霊的暴力となり危険性へと変化する。心身変容技法を多角的に捉えることで、未来の医療に適切に応用していくことを目的とする。

2、2015年度研究計画

- ①伝統で受け継がれた人間の知恵としての心身変容技法を広く深く理解し、プラスの側面を医療現場に具体的に活用していくことを検討する。そのために、マイナスの側面（霊的暴力、洗脳、自我肥大、走火入魔、ビジネスとのバランス・・・）に関しても多数の問題事例を集め、その共通点を認識することで予防策を講じ、医療現場へ安全に導入していく。
- ②エネルギー・波動医学の基礎・臨床にまたがる科学研究を総合的に行う。（入り口として、音が人体、皮膚、水へ与える研究など）
- ③呼吸法や意識状態が身心へ与える研究を行う。バイオフィードバックや脳波測定など。また、マイナスの側面の研究も行い、予防策を講じる。
- ④世界の医療制度を調べながら、様々な身心技法が未来の医療として調和できる社会のモデルケースを考察し、提案する。
- ⑤心身変容技法を応用し、対話が不可能とされている対象との対話術として応用する。（昏睡患者との対話（プロセス指向心理学コマワーク）、植物・動物との対話など） また、マイナスの側面の研究も行い、予防策を講じる。
- ⑥いのちへの深い理解へ至るため、生や死にまつわる様々な未解明の事例を集めてその本質を検討する。（臨死体験、胎内記憶、前世記憶・・・など） また、マイナスの側面の研究も行い、予防策を講じる。

.....

研究計画

篠原資明（京都大学）

多様体の狂気とまぶさびマンダラ

- 初年度 ジョルダナーノ・ブルーノと多様体の狂気
- 2年度 フーコーとドゥルーズにおける多様体の狂気 3年度 稲垣足穂とモダン・マンダラ
- 4年度 総括：多様体の狂気とまぶさびマンダラ

.....

研究計画書

井上ウイマラ（高野山大学）

全体計画：

心身変容技法における負の感情処理・浄化法や霊的暴力というテーマについて、人間関係における上下の力学が負の感情や暴力パターンの解消にどのような影響を与えるかという視点を中心にアプローチしてみたい。そのための基盤として、まずはマインドフルネス瞑想に関する総合的な経典である「念住経(Satipatthāna-sutta)」における五蓋と呼ばれる負の心理作用についての観察法と律蔵に記載された師弟関係における義務の特徴をまとめる。次に、D. スターンの情動調律(affect attunement)や R. エムディの感情的応答性(Emotional availability)という概念を介して母子間の情動的な響き合いに際してどのような姿勢で臨むことが乳児の負の感情処理のための発達促進的環境としてふさわしいのかについてまとめる。また、こうした研究の先駆けとなった D. ウィニコットの「思遣りをもつ能力の発達」に基づいて乳児の攻撃性や罪悪感という原初的な不安がどのようにして思いやりに変容されるかについての考察をまとめ、その臨床的な応用例として S. フライバーグの「赤ちゃん部屋のお化け(Ghosts in the nursery)」を取り上げて、多職種チームによるアウトリーチ型の母子支援について概観する。このようにして、適切な養育環境に出会うことができなかつたために思いやりへと変容されることのなかつた罪悪感がうつ状態や衝動的な暴力パターンを生み出す現状に対する具体的な対応法が明らかになる。さらに、A. ミンデルのランク(rank)という概念を援用して、上下関係という力の差を自覚的に使うことでお互いが楽になるような関係性や場の促進法についてまとめてみたい。

以上のようなアプローチの中で、母子関係から刑務所における矯正教育に及ぶ広範な領域において上下の力関係を自覚的な器として行使することによって、暴力的な負の感情パターンが解消されてゆく可能性について包括的なビジョンを提示することを目標とする。

2015年次計画：

中部經典の「念住経」では、五蓋（貪欲、怒り、眠気・不活発性、浮つき・後悔、疑）という5つの心理作用について、善悪の価値判断に左右されることなく、その発生過程と変化・消滅してゆくプロセスとをありのままに観察する方法が説かれている。また、そうした観察が、自らの感情を見つめること、他者の感情を見つめること、自他の感情を見つめることという3つの視点から繰り返し見つめることの必要性も明示されている。こうした観察法の有効性に関して、脳科学におけるミラーニューロンや共感現象に関する研究に照らし合わせながら検討してみたい。

次に、エンゲイジ・ブディストとしてサンタフェにウパーヤ禅センターを創始したジョアン・ハリファックスがマインドフルネスを医療者の燃えつき予防に応用した GRACE プログラムについて、伝統仏教の戒定慧の視点から解釈を施すことによって、伝統的仏教における身心変容技法が現代社会においてどのように再構築されているかを検討する。

.....

鎌田科研：「身心変容技法と霊的暴力—宗教経験における負の感情の浄化のワザに関する総合的研究」についての、活動計画

鶴岡賀雄（東京大学）

このテーマは、私の主要研究領域である近世キリスト教神秘思想においてもとても興味深いです。私としては、以下の三つの素材について研究発表／論文執筆ができればと考えています。これまでいくつかの場所で扱い、また論じてきた古い西洋の素材ばかりですが、とくに現代につながる回路を意識しつつ、考えを深めたいと思っています。

(1) 十六世紀スペインの神秘家十字架のヨハネは、その修道論の中で「魂の暗夜 dark night of the soul」という霊的・身心的状態を概念化し、神との合一に到るための不可避の段階として位置づけ、意義づけました。その「暗さ・苦しさ」の叙述はキリスト教思想史の中でも特徴あるものとなっています。この「苦しみ」という「負の感情」から、どのようにして、いかにして大きな歓びへと魂の情動性が変容するのか、その機微と理路を十字架のヨハネのテキストに即して跡づけ、ひいては彼の教説がもちうる普遍性および「現代的意味」にまで考え及びたいところです。

(2) 十字架のヨハネの「暗夜」は、ひたすら受動的な苦しみですが、もっと「攻撃的」になる「負の感情」もキリスト教神秘思想史には登場します。悪魔憑き現象にそれは典型的に見てとられます。十七世紀のイエズス会士ジャン＝ジョゼフ・スュランは、激しい悪魔憑きを経験した神秘家ですが、彼の叙述に「墮地獄の自覚」という深い負の感情のありようを探り、また十字架のヨハネのそれとは重なりつつも、より「近代的」に見える彼の自己観察に、そこからの解放の経路を窺い見たいと思います。

(3) これらの問題は、より広くは、「悪」の問題系だと思うので、キリスト教神秘思想史の中で「悪の積極性」について思考したベーメ（ずっと昔、鎌田さんと「神秘主義研究会」をやっていたころからのテーマです）を基点に、グノーシス的世界観に遡りつつ、より宇宙論的な観点からの「負の感情」の積極的意義について思い巡らせたいです。

(3') 上の続きとして、中世キリスト教の「異端」カタリ派の文献を扱って「善悪二元論」の可能性を考えられないか、と目論んでおります。

以上、大風呂敷を広げました。四年間の研究期間内になんとかやってみたいのですが、私も停年まであと3年を切り、それまでにこなさなければならないお勤めが多く、どこまで実現できるかおぼつきません。とりあえず本年度は、(1) から始めたいと思っています。

【全体計画】

現代社会における精神疾患は、深刻の度合いを増すばかりだ。日本では高い自殺率が慢性的な社会現象となっているが、最近是一般市民による凶悪犯罪も増加の傾向にある。近代文明の最先端にあるはずの超大国アメリカにおいても、動機不明の乱射事件が多発しており、精神疾患に関する国民の生涯有病率が50%近いという驚愕の調査結果が出ている。

エリク・エリクソンの「社会心理発達理論」では、第一段階の乳児期に「基本的信頼」が培われないと、長じてから発達障害が生じるとされているが、現代社会では機能不全家庭が増加する一途であり、個人的なトラウマ体験の蓄積がやがて大規模な社会不安を引き起こすまでに至っている。

熾烈な競争原理で動いている近代文明においては、個々人が強い自我意識を持っていることが極めて重要となるが、ストレス思考の中で意識と無意識が不自然に乖離し、無意識との対話がおざなりになるばかりである。解離性人格障害や憑依現象も、意識と無意識とバランスが崩れたところに発生すると推測される。無意識の心的エネルギーに注目したカール・ユングは、全人性を獲得するためには意識と無意識の統合が不可欠としたが、そのための具体的方法論については曖昧なままになっている。

ユング心理学でいう個人無意識や集団無意識には、「肯定的記憶」と「否定的記憶」の双方が蓄積されているはずだが、特に精神疾患の大きな要因となっているのは、後者のほうである。そういう意味において、「否定的記憶」は内面からの「霊的暴力」とも言えるが、現代精神医学は多剤処方走るばかりで、「否定的記憶」の浄化や、それとの和解ということは視野に入れていない。

仏教でいう「煩惱即菩提」などの考え方も、近代心理学や大脳生理学の応援を受けて、より合理的に解明される必要がある。また伝統的な「カルマ」という概念と、現代人が無意識裡に抱え込んでしまっている「否定的記憶」の関係性に光を当て、いかなる身心変容技法が、精神疾患軽減のために有効なセラピーのなり得るのかを明らかにすることは、「こころの未来学」における最重要課題の一つと考えられる。

【2015年度研究計画】

- ①光と影のコントラストが強い人間社会としてのアメリカにおける精神疾患の実態調査をする。
- ②アメリカの精神科医やカウンセラーと連絡を取り、なるべく事実即した資料を収集する。
- ③何らかのトラウマをもつ一般市民ともコンタクトし、彼らがそれに対してどのような治療法を選択しているのかを聞き取り調査する。

1 全体計画 (2015~2019)

4年間の研究期間中、チベットをはじめとするアジア、およびそれ以外の地域の霊的伝統において伝承されてきた身心変容技法について、それを支えてきた環境・文化・社会的コンテクストはいかなるものだったのか、また現代における発展、変容、変質を明らかにすることを目指す。

2、2015年度研究計画

2015年度は、以下の二点を中心に研究を行う。

①倍音声明瞑想の科学研究 (音響学)

倍音声明瞑想は、声を用いた癒し (voice healing) の中で、最も有効なものの一つとされ、心身にためこまれた怒りや嫉妬といった負の感情、暴力の記憶を、発声とともに放出し、深いリラクゼーションをもたらす効果がある。そのメカニズムの一端については、バイオエナジェティクスの観点から理解でき、またマインドフルネス瞑想とも部分的に共通していると考えられる (2014年7月の「身心変容技法」科研・研究会での発表参照)。

それにくわえ、倍音声明においては、きわめて高い倍音が鳴り響くことがもたらす「センス・オヴワンダー」が、海馬と情動脳を結ぶ回路を活性化させるのではないかと推測される (加藤+安永+永沢「倍音声明の音構造」『身

心変容技法研究』4所収、およびノックアウトマウスを用いた利根川進論文参照)。本年度は、このような観点から、高次倍音発生のメカニズムについて音響学の実験を継続するとともに、さらなる理論的究明を行う。また、癒しの臨床における適用の可能性、禁忌について考察する。

②身心変容のトポスと自然としての神

身心変容は、伝統的に特定のトポス（「聖地」「寺院」など）と密接に結びついて発達した。一方、現代のカルトの病理、霊的暴力は、都市型社会における自然からの離脱、自然からの疎外感と深く関連していると考えられる。このような観点から、身心変容のトポスと自然としての神について、実地調査および文献による研究を行う。

.....

「身心変容技法と霊的暴力」研究計画書

島菌進（上智大学）

1 全体計画（2015～2019）

日本の武士道から軍隊に至る伝統の中で、また、近代の集団の規律付けの中で、心身変容技法がどのように作用してきたかを考える。そして、広く「道」の伝統が及ぼした文化的影響を考えると同時に、日本の集団の暴力性の歴史を捉える視座を得ることを目指す。

2、2015年度研究計画

①近代日本の軍隊における暴力の組織化の特徴について考察する。軍人勅諭、軍規、内務班の訓練の特徴。集団的規律づけに利用されたさまざまな儀礼的要素や象徴、また集合身体の形成。

②靖国神社・招魂社の祭祀がもった機能。これは幕末の尊皇運動がもった精神性が、どのように近代軍へと継承されていったかを見ることにもなる。幕末の「志士」がモデルとなった、つねに死に備えている身体の形成。

③近代的な武士道の理念が軍隊だけでなく、学校教育や青年団などを通して、広く社会生活に影響を及ぼしていく経緯。体育会文化の系譜。日本的経営のもとになった会社文化の形成との関係。

④乃木希典という人物が及ぼした影響。乃木はなぜ、あれほどまでに民衆の崇敬を受けたのか。乃木は武士の身体をどのように近代軍隊の身体へと引き継いだのか。軍旗崇拝への影響、玉砕・特攻隊の文化的背景。

⑤近代軍隊が形成した身体性と暴力性は、他のタイプの近代性とどう関わっているのか。それはどのように戦後に引き継がれているのか、あるいは抑制されたのか。言説や社会関係のあり方からの考察と心身変容技法的な側面からの捉え方を結び付けてみたい。

⑥宗教集団は上記のような視点からの心身変容技法と霊的暴力の展開史にどう関わっているか。戦時期に受けた影響が、戦後にどう引き継がれているか。霊友会等の支部旗崇拝。創価学会の戦闘性。オウム真理教はそうした系譜から見て、どのように位置づけることができるのか。

.....

宗教・スピリチュアリティの合法（則）性の諸次元に関する基礎的考察

津城寛文（筑波大学）

宗教・スピリチュアリティの関わる事件、トラブルが、さまざまな局面に観察されている。それら、世界的紛争、社会的事件、市民社会での不法行為、迷惑行為に対して、諸学による対処的な批判、宗教学による分析的批判的な研究は、すでに数多い。しかし、それらさまざまな諸次元の事象を、多元的かつ統合的に研究する視点は、まだ確立していない。本研究の目的は、このような分離しがちな（しかし分離しきれない）諸次元の事象を、合法（則）性という基準でとりまとめて、合法（則）性の度合いを検討するための、基礎的な統合理論を模索することである。

宗教の事件化に関する従来の研究は、大まかにつきのような4つの事象群にまとまってくる。

1つめ、世界規模のものとして、国際的な宗教対立、宗教戦争、戦闘的原理主義により、人類的な文化遺産や無辜の民衆生活が破壊されている。

2つめ、国家規模のものとして、政府や国教勢力による宗教弾圧があり、逆に、宗教主導による革命がある。

3つめ、市民社会規模のものとして、宗教団体による反社会的行為、内部では教師による信者の抑圧や虐待、職場の宗教差別が起こっている。

4つめ、私的領域におけるものとして、小規模で散発的な非組織的な、サブカルチャーにおける不法行為、迷惑行

為、ハラスメントが、随所で生活者を巻き込んでいる。

このように区分けするだけでも、「合法」という場合、何の「法」に対して合致するのか、という問題が改めて浮上する。これは比較宗教学において、もちろん自覚されてはいるが、従来あまり強調されなかったポイントである。辞書レベルで考えただけでも、「自然法」「永遠の法」「天道」「人道」などと表現される理念的なものから、大小、善悪の「実定法」、地域や時代の慣習法、それぞれの人が持つ「良心」といった内心の「法」等々まで、さまざまな法が考えられる。さらに、人間原理 (anthropic principle) とは異なるレベルの、いわば善悪の彼岸に歴史法則、自然法則といった、諸法則がある。「合法性」とは、おもに人間原理に関する語彙であり、善悪の彼岸に関する場合、「合法則性」と区別するのが、誤解を避けるのに有効である。「合法(則)性」という表記は、この両者を含む意味を込めたものである。それぞれの「法」は相互に矛盾することがあり、その位置関係を明らかにすることが、本研究の1つの目標である。

.....

基盤研究 (A) 「身心変容技法と霊的暴力—宗教経験における負の感情の浄化のワザに関する総合的研究」(研究代表者：鎌田東二) (研究期間：2015 年度から 4 年間)

棚次正和 (京都府立医科大学・名誉教授)

今回の研究課題は、「身心変容技法」に「霊的暴力」が加わった。絶対界を意味する「霊的」は善悪の彼岸として相対的な二元的対立を超えているから、ここで言う「霊的」はそれとは異なる。自我が超越的(と想定する)世界との関連において生じた善悪混淆の相対界に関わる事柄としての「霊的」であり、その限りで「暴力」を扱うという話になる。最終的には、おそらく善悪の問題を真正面から論じなければなるまい。光と影(陰)が織り成すこの世界の多彩で多様な模様は、心模様をも含めて、影あるがゆえに美しいのか、逆に影あるがゆえに醜いのかと問うとき、影は無実体的な仮現性ゆえに美しくもあり、また醜くもあるのではないかと思われる。サブタイトルに注目すると、「負の感情の浄化のワザ」とある。負の感情を浄化するワザを立体的に、つまり光と影の両面から捉えようとする場合、影(負の感情)は光を当てれば消え去るのか、それとも光を遮る闇(陰)であり続けるのかについて、どこかで決着を付ける必要があるだろう。アーリマン、ルシファーのような宇宙論的意義を担ったレベルを思い浮かべるか、それとも提婆達多や麻原彰晃のような個人に集約されたレベルを思い浮かべるか。闇は実体視すれば、ますます強固になるが、相手にしなければ、やがて雲散霧消する。

さて、この 4 年間の研究テーマとして取り組みたいのは、負の感情を浄化するワザとして瞑想を含む「広義の祈り」に着目して、それが負性の感情想念を浄化させる機序を明らかにすることである。祈りは、一方で自ら体験できる直接的な自証性を持ちながら、他方でその効果・有効性の科学的検証が可能なものでもある。一人称的な体験的了解と三人称的な科学的説明とを統合するような視座から、主観と客観の対立を止揚する高次の客観性が獲得できるようにも思われる。自らの体験過程を内観しつつ、また祈りの実践者との対話・交感を通して共有された創発的なヴィジョンに基づいた実践法を探究し、それを現実の生活システム(医療や教育など)の中で活用することを提案できればと思う。

以下は、この課題に取り組むための予備的な問いの具体例である。「そもそも祈りとは何か」「祈りは prayer (prière, Gebet) と同じか」「祈りは意思伝達か世界創造か」「なぜ祈りは生まれるのか」「祈りの主体は誰か」「祈りの効果は人によって違うか」「祈りには治癒効果があるか」「祈りと感情想念の違いは何処にあるか」「祈りの中で感情想念は消えるか」「消える心と消えない心があるか」「祈りによって(祈りとして)人は何が変容するか」「祈りは行動ではないか」等々。こうした祈りの探究と深化を通して、祈りを基点に、我々の人間観と世界観が未曾有の仕方での決定的な転換を遂げることが期待される。

.....

マインドフルネス瞑想のニューロフィードバック

齋木 潤 (京都大学大学院人間・環境学研究所)

マインドフルネス瞑想はストレス低減やうつ病の再発防止など様々なメンタルヘルスの問題に対して効果を持つことが知られ、心理療法の新しい形として注目を浴びている。瞑想実践によって、自己を適切にコントロールするスキルが獲得されると考えられるが、その特徴は、効果が瞑想以外の多くの場面に般化することで、一種のメタスキルの獲得とみなすことができる。一方、瞑想の神経機序は不明な点が多く、明確な効果の自覚なしに長期間の訓練を要するため、瞑想がメンタルヘルス向上の技法として広く活用されているとは言い難いのが現状である。瞑想の

本質が注意、情動、自己意識といった内的な過程の変容にあることに着目し、脳活動情報をフィードバックすることにより行動変容を誘発するニューロフィードバック技術によって、マインドフルネス瞑想の効果を高め、効果を自覚しやすくできるのではないかと考えた。すなわち、瞑想における自己の呼吸やイメージを手掛かりとした行動変容に、脳活動に関するフィードバックを付加することにより自覚的に短期間で瞑想と共通する効果を達成することが本研究の目的である。マインドフルネス瞑想をニューロフィードバック研究の観点から見ると、般化可能性の高いメタスキルをニューロフィードバックで訓練できるかという重要な理論的問題を提起する。現在までのニューロフィードバックは痛みの制御のように個別具体的な課題と局所的な脳活動のフィードバックを用いていたが、瞑想においては、多くの領域の活動のネットワーク特性の変容が必要になると予想される。こうした高次の脳活動をニューロフィードバックする手法を確立し、この技術の高度化、有効性の向上に貢献することを目指す。さらに、ニューロフィードバック技術の開発における脳機能の解析を通して、マインドフルネス瞑想によって変容する、注意のコントロール、情動の制御、自己意識の在り方といった高次の心的過程の神経基盤に関する科学的な理解を深め、瞑想という行動変容技法の科学的基盤を提供する。最終的には、マインドフルネス瞑想とニューロフィードバック技術の統合を目指す。研究期間の4年間に、マインドフルネス研究の中で最も理解が進んでいる注意のコントロール機能に焦点を当て、般化可能性の高い機能のニューロフィードバック技術という研究構想全体の基盤を確立することを目的とする。

具体的には、第1段階として、注意のコントロール機能の神経基盤の検討によく用いられる MSIT 課題を用いて、ニューロフィードバック技術を用いた課題成績の向上を実現する。第2段階では、般化可能なニューロフィードバックの実現で、MSIT 課題とは異なる課題でニューロフィードバックを行い、訓練後の MSIT 課題成績の向上を実現する。

これらのプロジェクトを通じて、当該の課題とは直接関係のない課題を用いた注意のコントロール機能の訓練により、具体的な注意制御課題の成績を向上させ、マインドフルネス瞑想と同型の行動変容をニューロフィードバックによって実現する。

.....

「身心変容技法と霊的暴力」研究計画書

野村 理朗 (京都大学)

1. 全体計画 (研究背景)

野村研究室は、心の階層が織りなす複合的システムを明らかにし、個体形成にかかわる包括的な視点から、個人・集団間葛藤の予防・解決に寄与することを大きな目標としている。そのために心理学実験・調査法を軸として、脳画像化・賦活法 (fMRI・tDCS) により、注意集中 (瞑想等) や自他の認識、それにともなう自動・統制的プロセスについて、遺伝子多型・修飾による個人差、および社会・自然環境 (文化・風土等) との関わりをリンクさせつつ研究してきた。

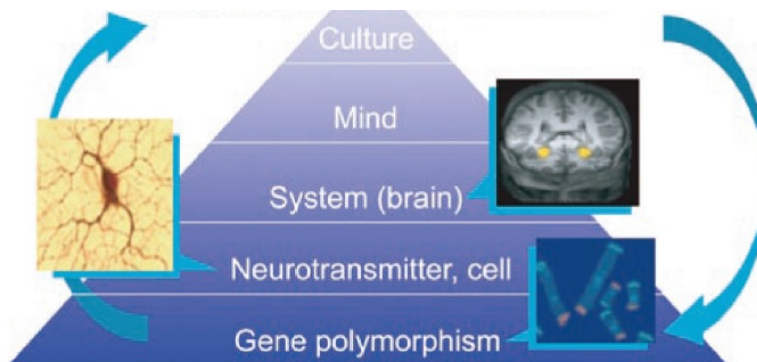


図1 こころの階層が織りなす複合的システム

2. 研究計画

こうした動向を背景に、本科研プロジェクトにおいては、(1) 負の感情が個人に及ぼす影響について、その脳内機構、およびバイオマーカー (ストレスホルモン、遺伝子発現等) を明らかにするとともに、(2) 負の感情の浄化 (開放・昇華) に関わる過程、さらには、(3) 個人にとどまることなく、それらが他者への行動 (攻撃行動、利他的行動等) へと結びついてゆく過程を検討する。このように人間の本性を解き明かすことにより、研究背景で述べたとおり、本研究室の目指すべき大きな方向は、現在の諸問題、とくには戦争・紛争の予防へと寄

与する教育プログラムを開発・普及することにある。
2005年度においては、主には（1）の課題に取り組む。

.....

「身心変容技法と霊的暴力—宗教経験における負の感情の浄化のワザに関する総合的研究」

「心理療法における身心の変容を引き起こす力とその感染力との関わりの研究」

研究分担者：河合俊雄

思春期に突然に統合失調症が発症したり、あるいは突然に膠原病などの自己免疫疾患に罹ったりするなど、心理療法で関わるクライアントは、まさに霊的暴力に直面しており、心理療法とは霊的な暴力の浄化に他ならないと言えよう。また暴力こそが人を変容させてくれるのも真実である。

霊的暴力をコンテインして変容させるからこそ、それは心理療法の中で感染力をふるい、様々な影響を及ぼすことがある。症状がセラピストにうつることはまれでないし、セラピストが身体的な病気になることもある。また感染力はセラピストのみならず、クライアントの周囲の人間に及ぶ。さらには浄化するはずの心理療法が、霊的暴力をふるうことがある。それは本物の霊的暴力のこともあれば、治療関係によって形成されている、いわば偽の霊的暴力の場合もある。

このような心理療法における心的な力との関わりの諸相を、心理療法の中から検討すると同時に、文学などにおけるパラレルな事象を取り上げて研究したい。

2015年度

心理療法における当事者および周囲の人間にとっても霊的暴力の現れについて

2016年度

村上春樹の小説における霊的暴力の現れとそれとの関わりについて：心理療法をヒントに

2017年度

心理療法における霊的暴力の感染について：セラピストの感染と浄化

2018年度

心理療法における霊的暴力の感染についての理論の構築

.....

基盤研究（A）「身心変容技法と霊的暴力—宗教経験における負の感情の浄化のワザに関する総合的研究」（研究代表者：鎌田東二）（研究期間：2015年度から4年間）

倉島哲（関西学院大学）

中国新郷市およびイギリスのマンチェスターにおけるこれまでの調査からわかったことは、太極拳の練習者には、技能の上達のみならず、生活全体にわたる広範な変化を経験した者が多いということである。それは往々にして、自身や家族の病気、退職や転職など、アイデンティティそしてスピリチュアリティの危機にかかわる変化である。

今年度は、これまで収集したインタビューのデータから、こうした危機にかかわる変化に焦点を当てて、太極拳の学習がこうした危機に対するコーピングをどのように助けるかについてケーススタディを行いたい。

来年度以降は、中国とイギリスの二つのフィールドで新たにインタビューを続けるのと並行して、日本の太極拳練習者にも調査の手を広げることを予定している。

.....

研究計画書

金香淑（目白大学前准教授/京都大学こころの未来研究センター連帯研究員）

1 全体計画（2015～2019）

現代韓国における社会的病理を、韓国の伝統的巫俗や韓国化したキリスト教がどのように救済するのか、シャーマニズム研究・身心変容技法研究の見地から解明することを目的とする。

対象となるのは以下のようなトピックである。

- ・セウォル号沈没事件と「救援派」の霊的暴力
- ・「新天地」教団の霊的虐待・暴力の問題
- ・キリスト教祈祷院における霊的虐待・暴力
- ・巫俗における退魔降霊と霊的虐待・暴力
- ・巫俗祭儀「治病クッ」「進爵クッ（神クッ）」に表れる霊的暴力
- ・日本における韓国系キリスト教会の伝道と霊的暴力の問題
- ・対馬「鮎戻し」溪谷における韓国巫俗人の浄化儀式

2 2015年度研究計画

韓国の巫俗における「巫病（神病）」をめぐる問題を研究の契機とする。巫病が生じ、治癒する背景、すなわち降神巫であれば巫俗人として自立する過程で必ず通らなければならない道を、実地調査等を通じて具体的に調査・分析し、「病と向き合う」ことの困難や課題、将来に向けての可能性など、一般人にも適用できる問題軸を設定して考察する。

.....

研究計画書

林 紀行（大阪大学大学院医学系研究科統合医療学寄附講座）

全体計画：

身心変容技法における負の感情処理・浄化法や霊的暴力というテーマについて、統合医療の観点から考察する。一般保険医療は肉体、もしくは精神に対してのみ行われているのが実態であるが心身医学的には肉体と精神は一つのものであり、片方に介入することは他方にも影響を及ぼしている（身心変容）という観点がなければ治療が困難である疾患も少なくない。特にJR福知山線脱線事故の被害者においてはからだところの傷の両方を抱えたものは、一般保険医療に抵抗性であることが報告されている（廣常秀人ら、心的トラウマ研究 第2号；85-93, 2006より）。これは表面上の問題をいくら改善させても効果は持続しないことを示唆しており、我々の外傷後後遺障害に対する補完代替医療の臨床試験でもPTSD様症状を呈するものは呈さないものに比べて一時的には有意に主観的苦痛の低減を示すものの、一週間経つと有意に効果は持続していないなどレジリエンスの障害が示唆された。ここでいうレジリエンスとはボナノ（Bonanno, G.）が2004年に述べた「極度の不利な状況に直面しても、正常な平衡状態を維持することができる能力」を指し、PTSDの予防にも大きく関わっている。2007年にアーミッド（Ahmed）が、「レジリエンス因子」には「自尊感情」「安定した愛着」から「ユーモアのセンス」「楽観主義」「支持的な人がそばにいてくれること」まで含むことを報告した。我々の研究室では一般保険医療に治療抵抗性の慢性疼痛を呈する患者に対し統合医療的なアプローチを用いることで個々人のレジリエンスを改善させ、セルフケアにまでつなげる介入を行う。またすべての統合医療が身心変容技法であること、それによって負の感情処理が可能であることを症例報告などを元に評価し、場合によって霊的暴力とも考えられるハラスメントの報告と予防に努めるべく、研究者が代議員、評議員を務める日本統合医療学会やエビデンスに基づく統合医療研究会などでシンポジウムを計画する。

2015年次計画：

JR西日本福知山線脱線事故ご被害者様対応本部にて「大規模災害被害者のケアを行うものに対する統合的なストレスマネジメント介入研究」を施行、結果をまとめる。

「治療抵抗性慢性疼痛に対する統合医療の実施可能性に関する検討」と題して大阪大学医学部附属病院にて計画、施行、結果をまとめる。

その他シンポジウムやセミナーを随時計画、開催する。